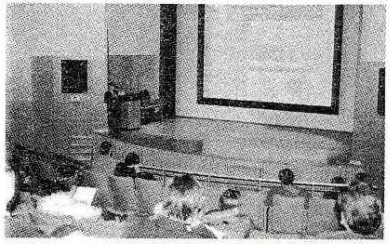
ISOは生き残りの道標

別海町建協21世紀会経営セミナー

磯田社長招き相談会も

【根室発】別海町建設業協会二十一世紀会（管野晴康会長）は二十二日、別海町マルチメディア館で中小企業経営セミナーを開催し＝写真＝、約四十人が参加した。同会会員・㈱イソジックの磯田忠雄社長を講師に招いてISO取得に向けた講習を行ったもの。管野会長は「ISOの取得はいまや建設業界はじめ他業界の中小企業にも要求されている。厳しい不況下、企業の選別もし烈になってくる。取得が企業生き残りの道標の一つとなってほしいとの思いで開催した」とあいさつ。

磯田社長は「ISOは建設業のみならず水産、サービス、農業、果ては小売業まで、近い将来必要となってくる。しかし、これまで取得コストの高さがネックとなって二の足を踏んでいる企業が多かった。だが、地域の産業の底上げのためにも、取得を推進していくことが是非とも必要」とし、同社が薦めるISO取得システムについて、インターネット上の同社のホームページ（www.iso.iec.com）を利用して解説した。このシステムは「不要なコンサルテーションをできるだけ少なくし、研修方法も集団化することで、取得の短期化、低コストを実現したもので、道内で初めて紹介するシステム」と同社長は話している。



講演の後、取得に関する相談会も開かれた。

架橋で地域間交流は？

本州・北海道架橋を考える会

フォーラムに200人参加

【函館発】本州・北海道架橋を考える会（福西秀和代表幹事）は二十二日、函館ハーバービューホテルで二〇〇三年フォーラムを開催した＝写真＝。青函地域をはじめ全国各地から会員や一般市民ら約二百人が参加、二十一世紀の地域づくりを展望する青函交流の在り方に耳を傾けた。

同会は、津軽海峡に架橋し、青函地域で人やものの交流を活性化させ、北東北と北海道で新たな経済圏確立を目指そうとするもの。現在、青函地域を中心に全国各地に会員約一千四百人。

開会式では福西代表幹事があいさつ。昨年の新幹線八戸駅開業を歓迎した上で、将来の新幹線の青函同時開業や北海道縦貫道の接続などを見据え、「新しい高速交通体系がこの地域にとって大きな重みを持ち、新しい町づくりが試みられていくものと思う」と早期実現を望むとともに、フォーラムを通して青函地域の在り方が活発に話し合われることを期待した。

また、杉内昭夫青森県企画振興部参事、松田光皖渡島支庁長、岡田芳樹函館市企画部次長がそれぞれ祝辞を披露。

続いて「津軽海峡からのメッセージ」―青函今昔ものがたり―と題して、元STVアナウンサーで函館大学特別講師の小林裕幸氏が講演。歴史資料や遺跡の共通性などをもとに、縄文時代から現代に至るまでの青函交流の足跡や、津軽海峡にまつわるエピソードなどを語った。

また、「高速大量輸送時代では、Face to Faceのコミュニケーションがいつでもできる手段をつくることが重要。技術が解決するなら、橋を架ける夢を捨てはいけないと思う」などと激励した。

最後は「新交通時代・あすの青函地域を考える」をテーマにパネルディスカッション。八戸、青森、函館の経済関係者四人のパネリストがそれぞれの立場から、架橋後の地域間交流がもたらす経済効果や町づくりの活性化などについて主張。

「橋ができれば時間のハンデを負わずにビジネスチャンスを広げることができる」「車で移動できれば、出張の途中でほかの土地に寄って市場調査ができる」などと橋の可能性を強調する声が。

また、「架橋はつぎの世代が引き継ぐ事業になると思う。まずはそのときに素早くダイナミックに活動できる組織づくりが必要」と現状を冷静にみつめる意見もあった。

6社に賞状と記念品

工事コンクール表彰式を挙行

【網走発】道森林管理局北見分局は二十一日、北見市内のホテル黒部で十四年度治山・林道工事コンクール表彰式を行った。北見分局長賞を受賞した四社と北見林業協会長賞を受賞した二社に、それぞれ賞状と記念品が手渡された。

十三年度施工の治山十件、林道十一件を審査、選定した。表彰状の授与は、守口典行分局長が分局長賞を四社に、倉本正行会長が協会長賞を二社に賞状と記念品を手渡した。

このあと、守口分局長は「豊富な経験と総合的な技術力などが高く評価された。受賞を契機に今後も技術研鑽に積極的に取り組んでもらいたい」とあいさつ。受賞者謝辞では野村興業の渡邊忠社長が「森林土木に携わる者も含め記術研鑽、光栄。こ層精進し

賞、林野庁

た＝写真＝。

北見分

林業土木技

はつぎの

【道森林管

賞】

▼治山工事

▽三角点沼

しりべつリバーネットがシンポ

川利用のルールづくりを

山口氏、金尾氏が基調講

【倶知安発】NPO法人しりべつリバーネット（牧野純二理事長）は二十二日、蘭越町公民館で「二〇〇三シンポジウムin尻別川」を開いた＝写真＝。尻別川流域住民が自ら川の現状と問題点、川利用のルールづくりと運用について考えようというもの。喜茂別町、倶知安町でも開催し、蘭越町が三回目。町外を含めて八十五人が参加した。

シンポジウムでは、河川環境整備財団の山口氏、金尾氏が基調講演。山口氏が基調講備における環境の大きさを体的方策の調。

また、同立った国土課企画専門は、国土交に学ぶ社会再生の取組再生の取組

そのあと、陸上自衛隊の